

円筒状ニット、入院中に触ると不安軽減 手編み「認知症マフ」効果実感

苫小牧東病院 市民団体が寄贈

苫小牧東病院(260床)は、認知症の入院患者を対象に、触ることで落ち着いた気分になるとされる円筒状のニット「認知症マフ」を導入し、効果を実感している。苦勞して手作りしていたが、市内の市民団体が3月に手作りマフを贈り、今後も寄贈を続ける方針。同病院は「マフを活用して患者さんのケアの質を高めていきたい」としている。

認知症マフは英国発祥。同病院のものは長さ約30センチ、色はさまざまな毛糸を

編み込み、花柄や動物の飾りをあしらっている。同病院では、希望する患者が日



寄贈された認知症マフの触り心地を確かめる苫小牧東病院の安宅麻生さん(右から2人目)

常にマフを握ったり、なでたりして愛用している。

同病院では入院病床260床の8〜9割が常時稼働している。病床を利用する患者の約半分は認知症や認知症の疑いがあり、医療的な処置のための点滴の管などを自ら外してしまうことがあり、その対策に苦勞していた。

同病院の認知症看護認定看護師の安宅麻生さん(44)が「ボールを握ってもらうなど気をそらす工夫をしていたが、なかなか改善しなかった」と試行錯誤する中で、昨年2月に交流サイト(SNS)を通じてマフを知った。

すぐにマフを手作りし、少しずつ増やした。半年ほどで約10個になり、患者が使うようになった。病棟の

看護師68人にアンケートしたところ、約6割が患者の不安や緊張の緩和に役立ったとし、約7割が点滴などの引き抜き防止に効果的だったと答えた。安宅さんも「こんなに効果があるのかと驚いた」と話す。ただ患者の誰にでも効果があるとは限らないという。

同様の商品はありませんが、市販されておらず、看護師が勤務時間外に少しずつマフを編み、1個製作するのに延べ4時間ほどかかっていた。負担が重かったところ、古布で雑巾などを製作し学校などに寄贈する社会貢献活動を行う一般社団法人「シュタット」がボランティアを申し出、3月13日に市内の介護事業所を利用する高齢者らと作ったマフ15個を同病院に寄贈した。

同法人代表理事の田中亮太さんは「今後も継続してマフを寄付していきたい」と話し、安宅さんは「患者さんの尊厳を保ち、看護師の負担軽減にも役立っている」と感謝している。

(佐藤圭史)